
黒の組織VS江戸川コナン

ミルフィーユ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒の組織VS江戸川コナン

【Nコード】

N5819J

【作者名】

ミルフィーユ

【あらすじ】

江戸川コナンVS黒の組織の宿命の対決!!

組織が灰原 哀の暗殺をたくらんでいることを知ったコナンは、命がけで灰原 哀を守ろうとする。

FILE 1 ジン

ルルルル、ルルルル、ルルルル・・・

ある建物の最上階にいる、ある男の携帯がなった。

「なんだ？」

男は低く問う。

「そんなに怖い声を出さなくてもいいだろ？ ジン」

「何の用だ？ スピリタス」

スピリタスと言われた電話の相手は笑みを浮かべた。

「バーボンからの情報だ。裏切り者についてのな」

ジンと呼ばれた男は、椅子に座りなおした。

「シェリーか？」

「ああ、住んでいる住所は、米花町2丁目22番地だ」

「ほう。ついにアイツを始末できると言うわけか・・・」

ジンは冷血な笑みを浮かべた。

「だが、一つだけ疑問が残ってる」

ジンは、眉間にしわを寄せた。

「というと？」

「その姿が、小学生なんだそうだ。顔は、ガキの頃のシェリーにそっくりなんだがな・・・」

『そんな・・・ありえない・・・』

ジンは思った。

『18歳の奴が、小学生・・・だと？』

「明日になれば、バーボンからまた情報が来る」

スピリタスはそういうと、電話を切った。

『考えるのは明日だ・・・情報が足りなすぎる・・・』

ジンは電話を置くと、そっと息を吐いた。

FILE 2 灰原哀

「おーい、灰原!! 早く来いよ!」

自称、少年探偵団団長、小嶋元太が大声で呼んでいる。

「はいはい、今行くわよ。」

じゃ、行ってくるわね、博士。私はそう言うランドセルを背負って、外へ出た。

『この、平和な時間・・・いつまで続くのかしら・・・』

ふとそんなことを考えながら、帝丹小学校へ向かう。

「おめー、またくだらねーこと考えてんだろ?」

サッカーボールをけりながらたしなめる様に問うてくる。江戸川コナン。

「全部顔に書いてあるぜ」

思わず顔に手を当てる。彼が小さく噴き出した。

「心配すんなって。前にも言っただろ?」

「そうだけど・・・」

江戸川コナン・・・本名は工藤新一。かつて、有能な高校生探偵として世間に名をとどろかせていた。

そんな彼が小学生の身体になってしまったのは、私が、以前所属していた組織で作った毒薬のせい。

A P T X 4 8 6 9

コレを飲んで、彼も私も、小学生の身体になってしまった。

彼が、顔を覗き込んでくる。

「どうした？ 顔色悪いぞ？」

「少し風邪気味だから、そのせいでしょう？」

私は彼を残し、すたすたと歩いていった。ずっと私を見続けた視線に気付かずに・・・

FILE 3 江戸川コナン

おかしい……。

おれは、隣に座っている灰原を横目で見る。

今朝から、灰原の様子に違和感を感じていた。

しかし、その違和感の正体に気づけない自分に苛立つ。

「何？」

いつから視線に気付いていたのか、灰原はノートから顔を上げずに問うてきた。

「いや……、別に」

おれは曖昧に返事をする。このことを言っても灰原が素直に答えてくれるはずがない。

「なら、じろじろ見ないでくれる？これ以上見ていると、また彼らにからかわれるわよ」

「え？」

灰原の言葉に周りを見る。元太と光彦が、おれを指差し、忍び笑いをしていた。

『あいつら……』

心の中で毒づき、視線を黒板に移した。

隣で、灰原がほっとしたようなため息をついたことは、気付かずに
いたまま・・・

FILE 4 バーボン

パシヤ

彼女に気付かれないように写真を撮る。

灰原 哀。おれの睨んだところによると、本名は宮野 志保。

数ヶ月前まで、組織でAPT X 4 8 6 9という毒薬を作っていた。

しかし、唯一の家族である姉をジンに殺害されたため、組織に反抗。処分を決めている間に、監禁されていた部屋から忽然と姿を消した。

「お前も、馬鹿な女だな・・・不満なんて表に出さず、ただ薬を作っていたらよかったものを・・・」

写真に向かってつぶやく。我々の組織を敵にまわして、のうのうと生きていられる人間など皆無だ。

『それを承知で・・・か。面白いな』

姉の事件で・・・いや、もっと前からか、組織がどんな働きをしているか承知しているはずだ。

そして、裏切り者には、絶対に容赦しないという事も。それをすべて分かっている逃げ出した。

面白い。馬鹿だが、実に面白い女だと思った。

『話してみるか・・・』

彼女は、おれが組織の一員である事を感じている。だから彼女から話しかれる事はない。

『こちらから話すしかないか・・・』

時間は、放課後。彼女の学校が終わって、一人になってからだ。

『楽しみだな・・・』

おれは写真を指ではじいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5819j/>

黒の組織VS江戸川コナン

2011年2月24日00時50分発行